現地視察

日本の森林･里山の現状

日時：平成２２年８月７日（土）　１０：００～１５：３０
講師：近藤　稔、田中　広樹（あいち海上の森大学コーディネーター）

概況

車中　名古屋大学大学院生命農学研究科の近藤助教から、日本の森林･里山の現状についての解説。
･フィンランドなどの北欧では平地林的なところが多く、「ハーベスタ」という機械で、伐木、枝打ち、長さをそろえる切断まで全て済ませてしまうが、傾斜の急な山の日本では全てを機械化することは難しく、人の手により支えられている部分が多いことから、高コストとなり採算が合わないので、放置され荒れた人工林が増えている。
･森林とは、木竹が集団的に生育しているものをいい（森林法）、FAO（国連食糧農業機関）では、0.5ha 以上で樹冠被覆率 10%以上かつ樹高 5m 以上のものと定義している。（日本では 0.3ha 以上、樹冠被覆率 30%以上、樹高 5m 以上かつ幅 20m 以上）

視察1　高性能林業機械による間伐実施林
･スギとヒノキが 60 年生の植林区域で、高性能林業機械による列状間伐が行なわれた場所。チェンソー　－　ロングアームグラップル　－　プロセッサ　－　フォワーダを用いて、2残 1 伐の列状に間伐を実施。作業路の伐開･開設による費用はかかるなど赤字（助成金でプラス）ではあったが、ロングアームグラップル方式による集材は高効率であった。

視察2　足助町木材協同組合（小径木加工工場）
・直径が 20cm までの木を加工する工場として、10 年前にできたもの。手すりや土留めなどの土木資材として利用されるものであり、円柱加工をすることで。同じ太さ・長さのものを多数用意できるので現場作業がスムーズになるなど、今後の活用が期待されている。
・腐食防止のためのインサイジング（穴を開け薬剤投入）により、耐用年数が 6 年から 10 年程度にまで延びるとの説明があった。

視察3　豊田市森林組合木材センター
・豊田市森林組合は平成 17 年 4 月に豊田市、藤岡町、小原村、下山村、足助町、旭町、稲武町にあった 7 つの組合が合併してできた組合で、組合員約 8,700 名、森林面積約 63,000ha（うち人工林 34,000ha）から成る。
・サラリーマンの平均月給で考えると、40 年前がおよそ 2～3 万円、現在はその約 10 倍になっているもかかわらず、木材価格は 40 年前に 22,000 円/m3 程度であったものが、現在は 12,000 円/m3 程度にまで下落している。このため、人工林の約 7 割が手入れされていない。
・森づくり団地（提案型の森林集約化）による経費削減や地域主体の森林維持管理などを目指している組合であるとのこと。